

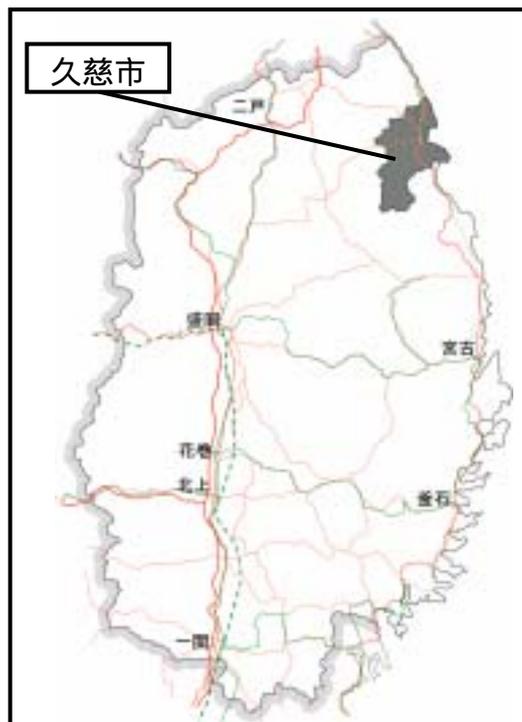
概要 雑穀食文化の復活をきっかけにした取組

山根六郷は、久慈市の中心街から 20km ほど南西に入った長内川源流域に位置。遠島山麓に 6 集落（上戸鎖、下戸鎖、端神、細野、木売内、深田）が点在する典型的な中山間地域。

炭焼きが盛んだったが、炭の需要が減った 1955 年頃から人口が流出し、2,500 人から 600 人に激減した。

久慈市在住の有志が結成した「山根六郷研究会」と地区住民が一体となり、復元した水車をシンボルに土地の料理や産物を提供する「水車まつり」や「くるま市」を開催し、他地域との交流を図ってきた。こうした交流から地区住民も自分たちの住む地域の貴重な文化や財産を再認識。地元で古くから行われている料理法による伝統食の提供や、その材料となる大豆やソバの作付けを増やすなど成果を挙げている。

山根六郷の場合には、山村の暮らしの中で大事な核のひとつとなっていた水車の復活が集落の人たちに雑穀を中心にした山村文化を見直させるきっかけになった。



経緯

- 1960 年代 多彩な雑穀の村で、代々、自給自足の暮らしを続けてきた山根地区にも、現代的消費生活が入り込み、炭焼きが盛んになり、雑穀畑は荒れていく。雑穀を脱穀する水車は朽ちていた。
- 1979 年 地域を考え直そうと久慈青年会議所が久慈市全域を見て歩き、文化分頒図を作成。
- 1983 年 3 月、久慈青年会議所会員が山根六郷研究会を設立。主な目的は、ふる里に伝わる先人の暮らしの知恵や技を、次代に伝えるための記録づくり。
- 1988 年 岩手県や久慈市、山根六郷研究会の支援により、山村の暮らしのシンボルである水車が、端神郷に復元される（桂の水車）。さらに、雑穀料理を取り入れた祭や水車市に話が発展し、雑穀食文化がよみがえる。
- 1989 年 第 1 回水車まつりが桂の水車広場で開かれ、水車は街場との交流の媒体となる。また、味の伝承グループ「桂水会」が誕生した。
- 1991 年 山根六郷研究会が 16 mm の記録映画 3 部作を完成させる。（1986 年「^{いど}麻と暮らし」、1989 年「山麓の食らし」、1991 年「ふる里の源流」）
- 1994 年 3 月、山根六郷研究会が「源流まるごと昔郷 山根風土記（山根六郷自然・文化景観等調査事業報告書）」を発行。山根六郷の明日への展望を図式化して掲載。
- 1996 年 岩手県が、農産物・食文化の拡大による地域活性化と技能の伝承を目指して「食の匠」の認定制度を創設。「桂水会」が認証を受ける。
- 1998 年 端神郷に 2 基目の水車「鳥居川原の水車」が復元され稼動する。
- 2000 年 農村アメニティ・コンクールにて、雑穀交流で最優秀賞受賞。都市と農村の交流事業の展開と交流により、地元住民が自分たちの地域に残る伝統文化が貴重な財産であることに気づき、伝統食の材料となる大豆やソバの作付けを増やすなど、地域を挙げての心安らぐ昔郷づくりの取組が評価された。

出典

山根六郷研究会ホームページ（<http://www2.dango.ne.jp/yamane6/>）

いわて地域づくり情報誌「ORYZA」52 号（<http://www.iwate21.net/oryza/oryza52/kuji.htm>）

現在の活動内容

山根六郷研究会

久慈市内在住の6名で発足、「10年間頑張ってみよう」を合言葉に、六郷の自然や先人の培った「暮らしの技や心」を伝承するための記録づくりや源流の自然や生活景観の保全復元等を地域の人々と共に実践。現在、会員は10名となり、それぞれの職能を生かした活動を展開中。

水車まつり（5,11月の第1日曜日）

端神地区の桂の水車広場で開催。水車による雑穀の加工実演や石臼による豆腐づくり体験ができるほか、伝統の豆腐田楽や手打ちそば、イワナ焼など里山ならではの食文化も販売されている。

このまつりは、雑穀の作付けを促進し、山村景観の形成に寄与すると共に、年中行事など山村文化の復活をも促した。

活動の歩み

